令和 6 年度 園評価書

園番号

57

園名

清水待機児童園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくできている B : 概ねできている、C : あまりできていない、D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
愛されて心も体ものびのびと育つ子	安心して自分の思いを表現する	・子ども一人一人が、ありのままを受け止めてもらい、安心して自分の思いを言葉やしぐさで表現している	子どもの一人一人のありのままを受け止めることで、保育者との信頼関係ができ、その子なりの仕草や言葉で思いを表現してくれるようになった	A	A		<ul style="list-style-type: none"> ・来年度も引き続き“安心してできる存在、場所”になるよう職員で連携し、子どもの思いを丁寧に読み取るようにする ・新入児の受け入れでは、子ども一人一人の生活リズムに配慮しながら、その子に合わせた生活ができるようにしていく ・環境会議は引き続き行っていくが、共有スペースの環境については子どもの発達や興味関心を捉えながら、遊ぶ時間や部屋の工夫等検討をしながら保育していく
		・思わず遊びたくなるような環境の中で、子どもが自ら関わり遊んでいる	子どもとじっくり遊び込む中で、子どもの興味・関心を捉え、その子に合った遊びの環境を整えることで、子どもが自ら遊びに関わり楽しむ姿が見られるようになった。しかし、学年の共有スペースの環境作りの難しさがあった	B	A		
		・生活リズムが安定し、気持ちよく一日を過ごしている (新入児は、個の生理的なリズムに沿った生活から少しずつ安定していく)	家庭と連携し、子ども一人一人の発達やその日の体調に合わせた生活リズムでゆったり過ごせるようにした。新入児は子どもの様子に合わせて、無理なく慣らし保育を進めていくことで、少しずつ安心して生活できるようになった	A	A		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	・子ども一人一人の発達や個人差に配慮した個別計画による保育を実施している	子ども一人一人の発達や特性を踏まえ、個別計画を作成し、保育した。2歳児は個別がわかる日誌へと変更し、発達や興味に合わせた保育を実施することができた	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・小規模な園ということもあるのか子ども一人ひとりに寄り添って日々見守ってくれている。子どもも友達や先生のことが大好きで、ふれあいを楽しみに登園している様子を見られる ・製作遊び等でいろいろな体験をさせてもらい、その度に成長していると感じる ・まりんのこと大好きで毎晩「せんせー、ぶーぶー、〇ちゃん」と話している。行くことを嫌がることもなく毎日、嬉しそうに出かける姿を見て、友達や先生と楽しんでいるんだなあ園での様子を想像している ・子どもに寄り添い丁寧に見てくれるので安心して子どもを預けることができている 	
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	・在園時間の異なる一人一人の子どもの生活リズムを保障している ・子どもの思いに寄り添い、早番、遅番時の保育内容を工夫している	一人一人の在園時間や生活リズムに合わせて無理なく過ごせるように配慮している。子どもの入退園に合わせて、早番番の保育室の遊びのコーナーの配置、玩具の見直し、保育の仕方について話し合いながら進めている	B	A		
	(3)環境を通して行う教育及び保育	・子どもの発達や興味関心に沿った玩具や教材の提供、自然を生かした環境の工夫を行っている	子どもの発達や興味関心に合わせて、玩具を入れ替えたり子どもと一緒に玩具を製作したりして環境を整えるようにした。また、公園に出掛け、自然物を遊びや生活に取り入れることができた	B	A		
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	・避難訓練、不審者訓練を様々な想定で実施している。事故防止のためのヒヤリハットを記録し、職員間で確認と改善策の検討周知をしている	毎月、クラス内で避難訓練時の対応について話し合いを行い、訓練を実施している。ヒヤリハットについては、記録に残し共有することが課題になった	B	A	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き子ども一人一人の発達・特性を踏まえ、個別計画を明日は保育する。振り返り、反省をすることで月日の保育に生かすようにする 一人一人の生活リズム、在園時間を考慮し、無理なく園生活を送ることができるようにする。早番番の環境は毎月環境会議で見直ししていくようにする 室内、園庭の環境は定期的に見直しを行い、子どもの発達や興味関心に沿った玩具や教材を提供していく。また、散歩に出掛け子ども達が、季節を感じられるようにしていく 避難訓練、不審者訓練は様々な場面を想定し、訓練を行っていく。ヒヤリハットは職員に予め用紙を配布することで記録することを意識し、月に最低一人一枚は提出できるようにする 	
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	・年齢発達に応じた基本的な生活習慣(食事、排泄、清潔、睡眠等)が身につくよう家庭と連携しながら一人一人に合わせた援助をしている ・手洗いなど保育者が一緒に行ききれなくなった気持ち良さを伝えている	家での様子を聞き、家庭と合わせながら一人一人に合った援助を行うことで、無理なく基本的な生活習慣が身につくようにした。手洗いなどは保育者と一緒に行き、心地良さを共有するようにした	A	A		
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	・個々の発達や特性を理解し、援助の仕方を職員間で共有し保育している ・必要に応じ、専門機関との連携を図っている	子どもの発達や特性は職員会議で共有している。支援の仕方については、今やっていること、やってみて伸びたことなど報告することで、関わる時の参考になった。また保健センターやソーシャルワーカーと面談し、情報を共有した	B	A		
5 組織運営	(1)組織体制の充実	・一人一人が自分の役割に責任を持ち、協力して園運営が進められている	職員一人一人が自分の役割を自覚し責任をもって取り組んだ。しかし、他の分掌の仕事内容や進行状況をもう少し把握するようにし、協力体制を整えるようにしたい	B	A	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援について、ケース検討だけでなく支援の方法や気になる子の発達具合について、職員会議の月反省で報告するようにしていく 分掌とそれぞれの仕事内容を見直し、活動がしやすくなるようにする。また毎月職員会議で進行状況を報告する等、各分掌の活動内容を他職員が理解できるようにしていく 研修テーマを職員全員が共通理解し、手立ての検証後成果と課題を明確にしておく。園全体で振り返りをしたりアドバイスを互いに出し合う機会を増やしていく 引き続き、子どもの見取りを行い、月1回の環境会議で園庭の環境の見直しをしていく 今後も送迎時や連絡ノート(コドモン)で子どもの姿や成長を伝え、日々の遊びの様子はお便りやドキュメンテーションで発信していく。家庭での様子は丁寧の様子を聞き取るようにする 自園の公開保育、他園の公開保育への参加は引き続き行っていく。近隣園との園児との交流は園庭での遊びの他、運動会や発表会等参加できる行事への参加ができると良い 引き続き、地域との交流を積極的に行い、その姿を子ども達にも見せていく 	
6 研修	(1)研修体制の充実	・研修テーマ「やりたいたい」につながる環境づくり」を共通理解し、手立ての検証を行い改善しながら保育が進められている	写真を用いて、子どもの姿から思いを読み取ることで他職員の視点や考え方を学び、自らの保育に生かすことができた。また研修後クラス環境を構成することができた	B	A		
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	・子どもの発達や興味関心に沿った、思わず遊びたくなるような環境が構成されている	月1回環境会議を行い、環境設定をし再構成をした。子どもの姿を捉え、今の興味関心がタイムリーに遊びに反映できるよう環境を作るようにしたが、職員全員で取り組むことが必要であった	B	A		
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	・保護者と保育者が子どもの育ちを共有し、成長を喜んだり、伸ばしたいところについて共に援助したりしていく	送迎時や連絡ノート(コドモン)を通して、子どもの様子を伝えることで一人一人の育ちを共有できた。2歳児は参観日を設け、園での子どもの様子を見てもらい、面談で保護者と子どもの姿を伝え合ったり悩みを聞いたりできた	A	A		
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	・近隣園の園児との交流の機会を設けている ・公開保育を実施すると共に、他園の公開保育に参加し、交流を図っている	職員は近隣園の公開保育に参加し交流ができ、報告することで他職員の学びにもなった。2歳児は連携園、近隣の園、高校にも遊びに行かせてもらい交流することができた。今年度は待機児童園3園で密に交流し、お互いの保育の様子を知ることができた	A	A		
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	・待機児童解消のため、積極的な受け入れを行っている ・近隣の方や散歩時に出会う方に挨拶や会話をするなど交流を重ねている	子育て支援課と連絡を取り合いながら、職員の体制を整え、子どもの受け入れをしてきた。園庭の横を通る方や散歩で出会う方に職員が積極的に挨拶することで、子どもも挨拶を真似たり、手を振ったりし交流ができた	A	A		